

あびの文化

発行人
藤井 吉彌
我孫子市寿
2-21-23
04(7185)
1996

プロジェクト報告会開催

三年前、スタートしたプロジェクト活動は会の活性化と自ら「我孫子の文化」を学び、仲間の輪を広げることとを目的としたものだが、毎年一回その活動状況を発表してきた。さらに今年5月には「三十年誌」にその成果の一部を報告することができた。

今回の報告会では今まで続けて来た地道な活動の蓄積の上に新たな一歩を進めるため各プロジェクトの進捗状況や成果の発表を披歴し、さらにプロジェクト相互で情報交換を行い、今後の進め方について協議すると共に会員同士の親睦を深めることを期待している。

現在プロジェクトに参加していない会員の参加も勿論歓迎で新規にプロジェクトに参加する機会にして貰いたい。また新たなプロジェクトの提案や新規加入も大歓迎。会員宛には既に案内状を送済みで多くの方の参加を期待している。報告会の概要は以下の通り。

1. 日時 10月16日(日) 14時～16時30分
2. 場所 我孫子市北近隣センター並木本館ホール
3. 内容
 - ①プロジェクト活動報告及び今後の予定
 - 発表者 各プロジェクト担当者
 - ②懇親会(飲み物、茶菓つき)
4. 会費 一、〇〇〇円

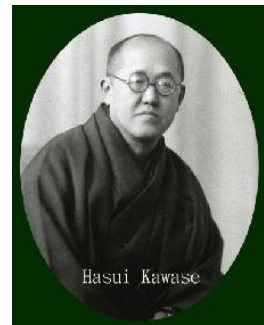
川瀬巴水木版画展

11月2日～12月4日に開催

今年三月十八日から六日間の予定で開催する予定であった「川瀬巴水木版画展」は東日本大震災のため中止となったが、今秋、装いも新たに会期も十日間と延長した形で開催することになった。我孫子の文化を守る会も今回の展示会を運営する「川瀬巴水展実行委員会」構成団体の中心メンバーとして参加・協力する。

大正・昭和期、日本の伝統文化である木版画にも大

きな動きがあった。それは「新版画運動」と呼ばれるもの。これは江戸時代末期に全盛を誇った木版画を再現し、版元、絵師(画家)、彫師、摺師の分業による浮世絵以来の伝統的木版画を復興しようとする運動であった。



Hasui Kawase

同じ色を何度も重ねることによる表現法を開拓し、木版画の可能性を広げた。

巴水は洋画を岡田三郎助に学んだ後、鐫木清方の門下生となり、洋画・日本画・浮世絵それぞれの長所を生かした個性的な木版画を600点あまり作成した。巴水の描く風景画は欧米人の理想とする日本の風俗・風景であり、また構図・色合いも欧米人好みであったため欧米でたちまち評判になり、大いに輸出された。日本国内でも遅ればせながら昭和28年、文部省文化財保護委員会からの依頼で木版画技術記録作成のため、伊東深水の美人画「髪」とともに巴水の「増上寺の雪」(右下図)が制作された。これらの作品は文部省に収められ、来日された国賓の方々に贈呈されたと聞く。またこの版画のスケッチ、原画、版下、版木などすべては東京国立博物館に收藏されており、常設展などで見る事ができる。

巴水は我孫子にも訪れ、手賀沼の風景を描いた版画をそのスケッチとともに残している。

川瀬巴水展実行委員会の鈴木昇委員長は「今なぜ巴水展か?」という質問に以下のように語る。

「木版画は環境問題とも大きく関係しています。版画は山桜から作られますが、その山桜の木が少なくなってきたりします。また和紙を作る「こうぞ」も同様です。その上、木版画に携わる職人も少なくなっています。木版画を大切にすることは、環境を大切にすること

につながり、伝統文化を守ることにもなります。

人間関係をとても大切にしていた巴水は74年間の人生で、震災、戦争を経験しましたが、彼が付き合ってきた人間関係には大きな変化がなく、義理、人情、人との繋がりを大事にしました。現代社会が抱える問題とともに今、日本人が抱える課題の解決策に今回の巴水展は何かヒントを与えてくれるかも知れません」

展示会に先立ち11月23日(水)午後2時から林望氏の講演会「巴水は木版画の詩人―その夕景のなつかしさ」が開催される。(定員100名。往復、ガキのみによる申込。応募者多数の場合抽選)

会期中のボランティア募集

当会では前記「川瀬巴水木版画展」の手伝いをしてくれる方を募集します。内容は①受付②会場係③イベント整理です。時間帯としては①10時～15時②15時～19時の2種類です。採用された方は会期中の展示会入場は無料、かつ①の時間帯にあたった方には昼食が支給されます。問合せ、応募については美崎(電話番号04718210861)まで。

「我孫子の文化 三十年」完売

今年五月発行の当会創立三十年記念誌「我孫子の文化 三十年」は全部で五〇〇部印刷しましたが、発売当初から朝日新聞や「イースト情報」などのタウン紙などで紹介されるとともに市内の書店にも置かせて貰った結果、8月末でほぼ完売しました。特にエスバ内の書店「ブックエース」では百二十冊も販売して頂きました。会員の皆様からの推薦、紹介も多くあったと思われまます。紙面を借りてお礼を申し上げます。



第8回関東建築探訪の会 「稲毛・千葉を訪ねる」

藤井 吉彌

今回の探訪の会では明治四十五年(1912)に海岸の砂浜を臨時飛行場として、日本民間航空発祥の地となり、又東京近郊の保養地として、多く資産家が競って瀟洒な別荘を建て近代千葉をリードした稲毛と、県名の元になった千葉氏の居城のあった千葉市を六月十四日に訪ねました。参加者は七人でした。

千葉市のガイド組織はこれまで二年に亘りボランティアを教育し、スタートしたところで、我々が初めてのお客のことでしたが、大勢を入れて対応してくれました。

始めに稲毛に行き、愛新覚羅溥儀邸、旧神谷伝兵衛稲毛別荘、旧日本勧業銀行本店等を見学しました。溥儀邸は当時の海岸高台にあり、新築当時はすぐ前が海という絶景の地に建つ純和風の住宅で、間取りも溥儀氏の生活に合わせた設計で、造作は当時の最高級のレベルとなっています。

神谷別荘(下写真は葡萄酒で有名な神谷酒造の創業者神谷伝兵衛が建てた別荘です。正面のアーチはロマネスク建築に通じるデザインでその中に和室もうまく取り入れた当時の日本最先端の設計になっており、千葉で最初の鉄筋コンクリート構造であることも特筆されることです。庭も洋風の中に和風を混在させ、当時の人が目を見張る存在であつたと思われれます。

勸銀本店は日比谷公園まえに建てられてもので、当時の高名な建築家妻木頼黄の設計となっています。全体のデザインは城郭から構想した雄渾な構成で、明治期の銀行経営者の心意気が感じられます。

昼食後千葉市に行き市立美術館、千葉神社、千葉城、千葉教会教会堂を見学しました。市立美術館は旧川崎銀行千葉支店を千葉市の指定文化財として保存するに当たり、その外側と上部に構造物を作り、旧川崎銀行と、その外側、上部に新設された新千葉市美術館を一体の建物として設立されました。

千葉神社は千年の歴史がある古刹で、千葉氏の守護神であり、長く地域の信仰をあつめています。今の社殿は鉄筋コンクリートで再建されたものですが、壮麗



な神社建築になっています。

千葉城は県庁近くの千葉氏の館跡(猪鼻城跡)に郷土博物館として小田原城を模して鉄筋コンクリート五階建てで建てられました。館内には平安期の桓武天皇ひ孫高望王の上総介から始まる東国統治の歴史が判りやすく展示されています。

千葉教会は一八七九年に創立されたプロテスタントの教会で当時の教会建築の様式をよく残しています。県庁前で羽衣伝説の話の伺い解散となりました。

第103回史跡文学散歩(報告)

「志賀直哉の青春の地と終焉の地を訪ねる」

藤井 吉彌

厳しい残暑が続く中、二十三人の方が参加され、越岡副会長の名解説により、六本木のブリヂストン社宅群の中にある直哉旧宅の史跡看板前から始まりました。今は六本木ヒルズやミッドタウン等の近代的ビルに囲まれた敷地ですが明治の初めまで荏原郡渋谷村と呼ばれ、今の我孫子よりはるかに田舎の風情たっぷりな地だつたようです。父が建てた一、七〇〇坪近い土地にある住宅で、直哉は十四歳から十五年間の青春を過ごしました。近くに往時の面影を残す檜町公園などがあり、昔の渋谷村の佇まいを偲ぶことが出来

ます。青春期を大変環境の良い場所でも過ごした結果が作品に如何に反映されているかは志賀文学を読み込むしかありませんが、人格形成期に過ごした地を訪ね、改めて志賀作品の原点が如何なる形で形成されたかを考えたいと思いました。

次に江戸期の長州藩毛利家下屋敷を訪ねました。ここは明治期に陸軍の駐屯地となり、終戦後は防衛庁檜町庁舎として使われていましたが、防衛庁の市ヶ谷移転により、土地を民間に払い下げ、2万坪の土地が東京ミッドタウンとして開発されました。ホテル、美術館、マンション、事務所、ショッピング街等多くの機能を備えた街区に変身し、大勢の人を集めています。

ミッドタウンの公園を横断し、外苑東道のミッドタウンと対面した場所にある深広寺に向かいました。ここは今を時めく徳川二代將軍秀忠夫人お江の方崇源院の火葬の地で、幕府後期、昌平黌の儒官となり文教関係の中心的存在であつた佐藤一斎の墓のある寺です。間口はごく狭くひっそりとした寺でした。

六本木ヒルズの脇を通り、専称寺の墓地を脇の通りから拝観しました。見たのは新選組の沖田総司の墓で、沖田家の大型の墓脇に小屋根を被せた小ぶりの墓があり、塀の外の説明書きで、沖田の人氣振りがよく分かりました。若い女性の訪問が多いそうです。

次に元盛岡藩の下屋敷であつた有栖川公園に向かいました。いまや外国大使館が列をなす麻布地区にこのような鬱蒼たる森に囲まれた公園があることが信じられない静かで落ち着いた公園でした。

有栖川宮熾仁親王殿下の軍装騎馬銅像が公園の外れにひっそりと置かれているのが印象的で、今の我が国を象徴している様でした。

昼食の後、黒田藩の歴代藩主を祀る祥雲寺、吉良上野介夫人梅厳院の墓がある東北寺の脇を通り、江戸中期の荻生徂徠門下の高名な漢詩人で後進のために尽くした服部南郭の旧別邸前を通り、「群書類従」を発刊した塙保己一が開設した和学講談所跡(群書類従の版木を下付された渋沢栄一が大正十一年に保己一の業績を引き継ぐため温故学会を設立し、この地で活動を継続している)等江戸郊外の多岐に亘る史



跡を見学しました。

本日の散歩の終盤・常盤松の直哉終焉の遺宅を拝見。渋谷駅近くの閑静な住宅地の細い道路に面し、幅一間程の間口の奥まった敷地に慶応大学校舎、国立博物館東洋館等を設計した谷口吉郎による瀟洒な住宅がひっそりと建っていました。晩年の直哉には大変使い勝手の良い設計だったようで、体力の衰えにもうまく対応していたようです。今は跡継ぎの直吉氏が住んでおられます。

最後に金王八幡神社に向かうと勇壮な太鼓の音が聞こえ、にぎやかなお祭りで賑わっていました。直哉の青春の地から終焉の棲家までを辿る暑さの中の散歩を終え渋谷駅から我孫子への帰途に就きました。越岡総司令官のバイタリテイある指揮で、彼岸前の暑さの中、皆さん何とか歩ききった一日でした。

あびこだより 1号

240国・地域を旅して

高康治

公の場で世界の旅の話をするのは、東日本大震災の恐怖感が冷めやらぬ4月4日、NHK千葉放送局のラジオ番組「まるごと千葉60分」の生放送出演以来である。

総合商社(三井物産)勤務時代の1969年、酷寒の1月にロシア(当時はソ連)の首都モスクワへ出張して以来、駐在・出張・旅行(個人手配旅行が多い)で訪れた国と地域は実に240を超え。その間、1974年、1977年は激動の中東の国クウェート、1979年、1984年は世界最大のイスラム教国インドネシアで居住した。

さて、国際的に認められている国は、日本を含め世界で194もある。私はこれら全ての国を訪問済みである。しかし、実際には195カ国(日本は除く)を旅しており、2つも多いカラクリは実効支配の国がある。厳しい現実である。なお、7月9日には南スーダンという新しい国が誕生したので、195が最新の世界の国の数である。

講演会では、感嘆した世界の絶景、秘境に住む少数民族、おススメしたい世界遺産、究極の海外旅行、治安と紛争地帯、印象的なグルメ、失敗談など、世界の表裏を40数年にわたり見聞してきた実体験をベースに語りたい。時間があれば、我孫子と世界の関係(バーナード・リーチ等)、イスラム教の戒律などについてもお話ししたい。

74歳という人生の最終章を迎えながら、なぜ世界の旅を続けることに未練があるのでしょうか? 答えは、「其処に世界があるから」。世界(世間)は時には狭いが、やはり広いのが世界。私の外国放浪の旅は、命あるかぎり続けざるを得ない宿命かも知れない。また、分身に2番目の妻のようなプライベート・ミュージアム「世界の人形館」を彩る民俗人形など、コレクション収集の旅も来世に行く直前まで続くであろう。

(世界の人形館代表)

橋本貞秀のことを是非知って欲しい

越岡 禮子

「橋本貞秀を知っていますか?」と聞くと、殆どの方が「橋本貞秀って誰?」と答えます。私としては少し残念な思いです。

橋本貞秀は文化四年、下総の国布佐の出身と伝わる歌川派の浮世絵師です。

貞秀は美人画を得意とする二代歌川豊国(同門の歌川豊重が二代目豊国を襲名していたので実際には、国貞は三代目豊国であり、現在も豊重と区別する必要があることから「三代豊国」と表記されることが多い)の弟子で、一八六七年(慶應三)に開催されたパリ万国博覧会に徳川幕府が出品した浮世絵画帳の総代を務め、幕末の浮世絵界の重鎮であった人です。

玉蘭齋、五雲亭など生涯に十四の号を使い分けていましたが、広重、北斎、歌麿のように一般に知られていないのには理由があります。それはジャーナリストの目で作品を描き、趣より後年の時代考証となる作品を描くことを心がけていたからです。神田の名主、齊藤月岑(げつしん)がカメラのない時代、長谷川雪且に『江戸名所図会』を描かせそれが今、大変に歴史的価値が認められているように、貞秀はいち早く長崎で洋面に接し、その技を浮世絵に取り入れたのです。折しも安政六年、横浜港が開港し、貞秀はすぐに同地に踏査し、横浜新開地の風俗や鳥瞰図を描くようになります。現在これらの作品は横浜浮世絵と呼ばれています。横浜の開港資料館や博物館に行きますと多くの浮世絵師の作品とともに貞秀の作品を観ることができますが、その技量は他の追随を許さない抜群の秀作ばかりです。貞秀の作品の解説の中に貞秀が布佐出身であること、日本の鳥瞰図絵師の第一人者と紹介されていることを認めると、我孫子の住人である私達は誇らしい気持ちになります。

貞秀は生涯独身であったようで北は松前から南は長崎まで旅をしたといわれています。また利根川の対岸、伊奈村から出た間宮林蔵の著書の挿絵や図説も手掛けていて、地元下総の作品も多く、その一つに『利

根川図志』があります。この本は布川の医師、赤松宗旦により発刊され、その挿絵で貞秀の銘のあるもの、無いものがありますが、貞秀の画風そのものといわれている作品に、木下河岸、地藏市などがあります。他にも銚子の万祝(まいわじ)の景や国府台風景を描いたものは良く知られています。

晩年は印刷技術の進展や西洋絵具の進出で廃れていた浮世絵ですが、貞秀は技量の確かさから教科書の挿絵を描いていたと伝えられています。

我孫子の皆様には是非橋本貞秀を知って欲しいと思います。

今年度会費(二千円)納入のお願

本会はひとえに会員皆様方の会費によって運営されています。郵便振替口座(00190-3-135476)『我孫子の文化を守る会 伊藤一男』宛お振込みください。

楚人冠俳句「序跋詩歌集」より 杉村楚人冠

昭和五年以前 秋

鈴虫や月に落ち行く兩三騎

戀と知りてわが襟垢のつめたさよ

冬

暁(あけ)の湯や小窓にせまる雪明り

櫓(ほた)たいて文化を呪ふ物がたり

(ほた; 囲炉裏や竈(かまど)でたく薪。掘り起こした木の根や樹木の切れはし。ほたぐい。ほたぎ)

柩を護して門を出づれば冬の月

炭の香に衣(きぬ)の香に人酔ひごち

ひしめきし人去りて霜の亂れかな

山茶花に灯一つ残る鎮守かな

第104回史跡文学散歩

「赤坂、青山に遠ざかる時代を偲ぶ」

トレンディな街、赤坂、青山にも作品を読むだけでは分からない空気を体感できる場所があります。近年、大作として放映されている「坂の上の雲」にも登場する乃木希典、地元ゆかりの文士が多く眠る青山霊園、東葛地区に多い曹洞宗の寺の関東別院長谷寺には江戸で一番大きい文六の観音様が祀られていて感動します。見どころの多いコースです。

1. 日時 11月20日(日)9時

我孫子駅改札口内集合(千代田線乃木坂まで 切符購入)

2. コース 乃木神社(宝物館、旧居など)ー青山霊園(志賀直哉、齊藤茂吉、中勘助など著名人の墓多数を案内します)ー長谷寺ー表参道駅(小雨決行)

講師・ガイド 越岡禮子氏(当会副会長)

参加費 会員 無料、非会員 500円

申し込み TEL&FAX (七二八四)二〇四七

越岡まで(締め切り) 11月12日(土)

今後の行事予定

□「放談くらぶ」

日時 10月2日(日)14時〜16時

会場 アビスタミニホール

講師 高 康治氏(当会会員、世界の人形館代表)

演題「世界240国・地域を旅して」

世界の絶景、秘境、珍しい食(物)、危険な地域など

◎参加費 無料

日時 12月4日(日)時間は未定

会場 アビスタミニホール

講師 越岡 禮子氏(当会副会長)

演題 「橋本貞秀のことを是非知って欲しい」

□プロジェクト開催予定

「歴史文化くらぶ」

日時 11月5日(土)14時〜16時

場所 東高野山自治会館(天王台駅徒歩8分)

話者 三谷和夫(本会前会長)

演題 我孫子地名考(1)

―地名の由来から街おこしを考える―

参加費 200円(会員無料)先着20名

申込み・問合せ先 三谷(七二八三)一〇七七

「関東の建築探訪」

日時 10月18日(水)

場所 川崎市日本民家園ほか

申込み・問合せ先 吉田(七一八三)七三七九

当会の最近の動き(報告、予定)

散歩部会

9月18日(日)、第103回史跡文学散歩実施。18名。

手賀沼部会(予定)

10月9日(日)手賀沼フォーラム「川巡り、若山牧水記念歌碑見学」

11月4日(金)「手賀沼の史跡を巡る」

研修部会

10月2日(日)放談くらぶ「世界240国・地域を旅して」

12月4日(日)「橋本貞秀のことを是非知って欲しい」

次回役員会(予定)

日時 11月3日(木)13時30分

場所 アビスタ第5学習室

◎あびこ楽校協議会(当会から委員参加)今年度事業計画

「あびこ楽校コンサート」カッパと鳥と手賀沼と」

日時 10月29日(土)。場所 けやきホール

◎今期上半期新入会者紹介(敬称略)

高康治(4月)、坂田慶子(4月)、笹原和子(5月)、

佐々木侑(6月)、田中由紀(6月)、二階堂建(6月)、

古川泰子(6月)、柳川幸治(6月)、南雲雅夫(7月)、

市原あき(8月)

編集後記 放射能影響についてテレビで「こゝまでは安全」

「今の状態なら問題ない」などと発言した学者や放射線専門家は「御用学者」と呼ばれ今は遠ざけられているようだ。一方「放射能の恐怖を煽ってきた人」には化学的に正しい情報は不都合な真実だ」という指摘もある。我々としてはどちらの意見も公平に聴き冷静に判断する必要がある。患者が医療被曝を恐れて放射線診断やCTを受けたがらず、却って死に至るのを心配する医師もいる。(美崎)